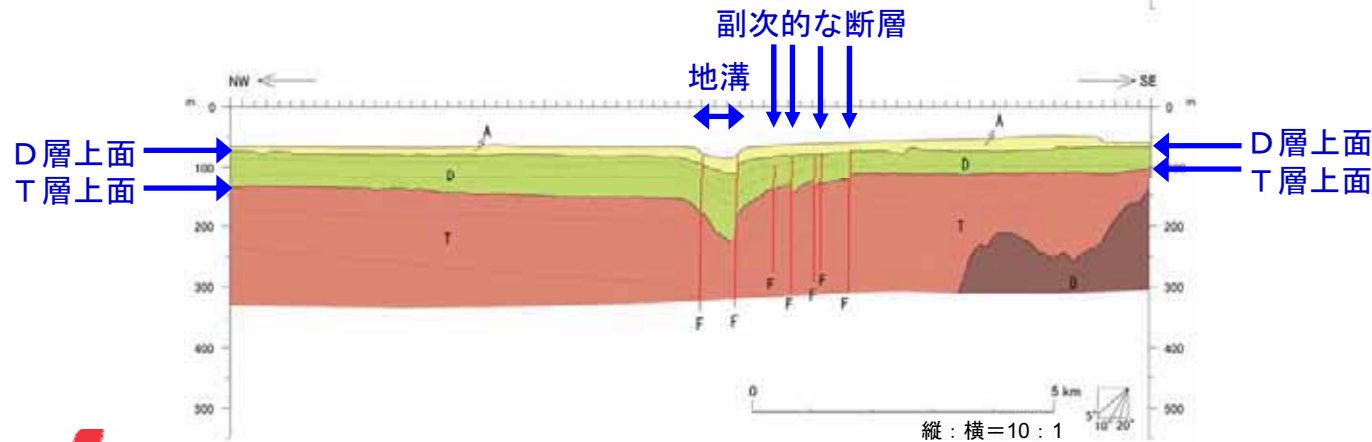
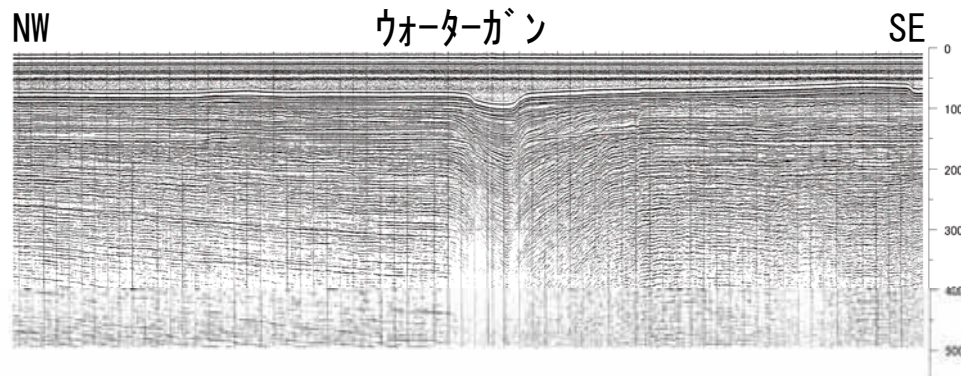
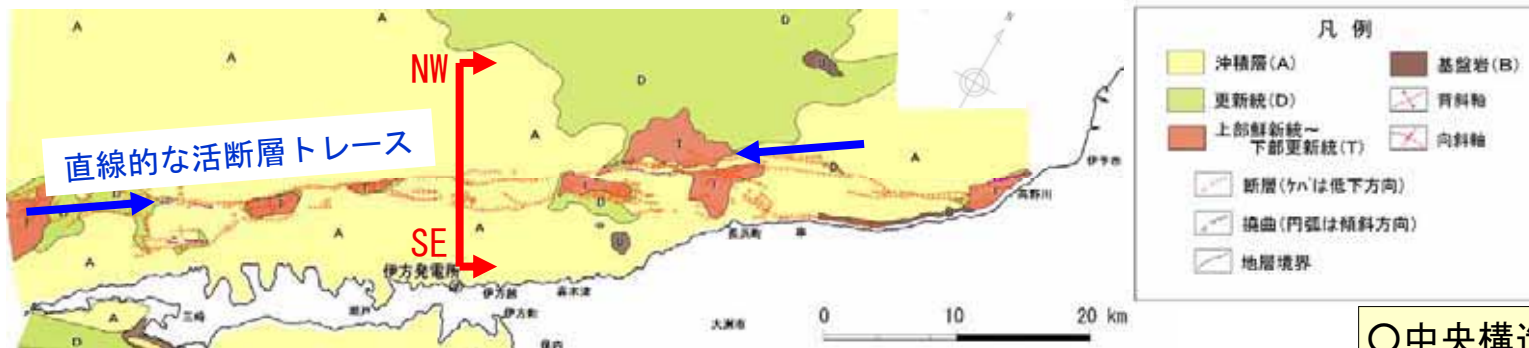

II 4.4 総合評価

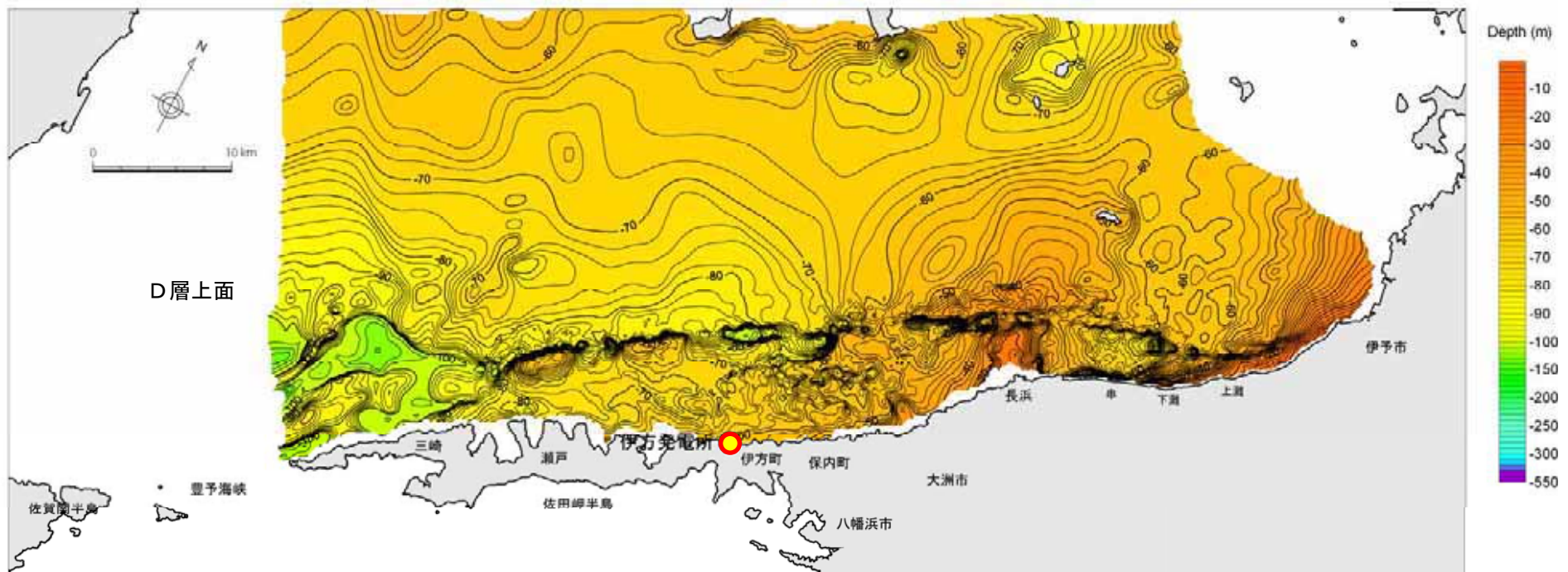
II 4. 4-1 敷地前面海域の断層群の性状



- 中央構造線断層帯は、沖積層を変位させ、海底面にも変形を与える高角の活断層として認められる。
- 非常に直線的な活断層トレースを示す。
- 断層分布域の南北でD層上面に顕著な標高差は認められず、横ずれの卓越する断層運動が推定される。
- 変位の累積しているT層上面では、断層分布域の南北でやや北落ちの標高差が認められ、わずかに正断層成分を有すると推定される。

II 4. 4-2 変動地形学的な評価①(D層上面)

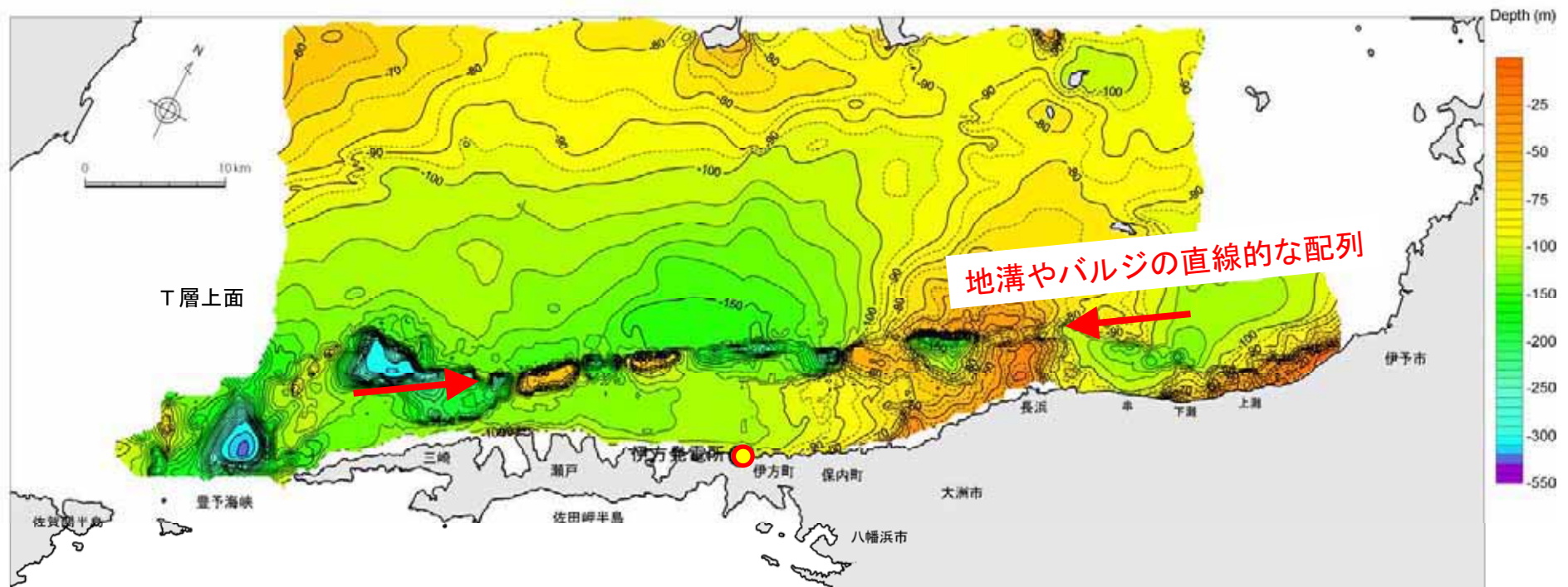
○断層分布域の南北でD層上面に顕著な標高差は認められず、横ずれの卓越する断層運動が推定される。少なくとも地下浅部における活断層はほぼ鉛直であり、震源断層もほぼ鉛直である可能性が考えられる。



D層：更新統， D層上面は沖積層基底面と対応する。

II 4. 4-3 変動地形学的な評価②(T層上面)

○敷地前面海域の断層群の分布域に、横ずれ断層変位に伴って形成された地溝やバルジが非常に直線的な配列を示し、少なくとも地下浅部における活断層はほぼ鉛直である。震源断層もほぼ鉛直である可能性が考えられる。

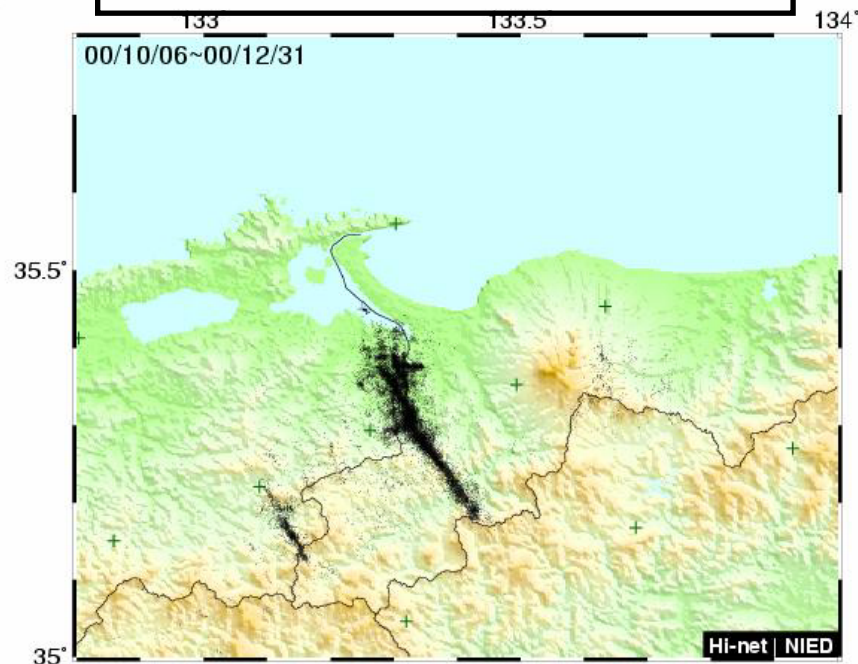


T層：上部鮮新統～下部更新統

II 4. 4-4 地震学的な評価

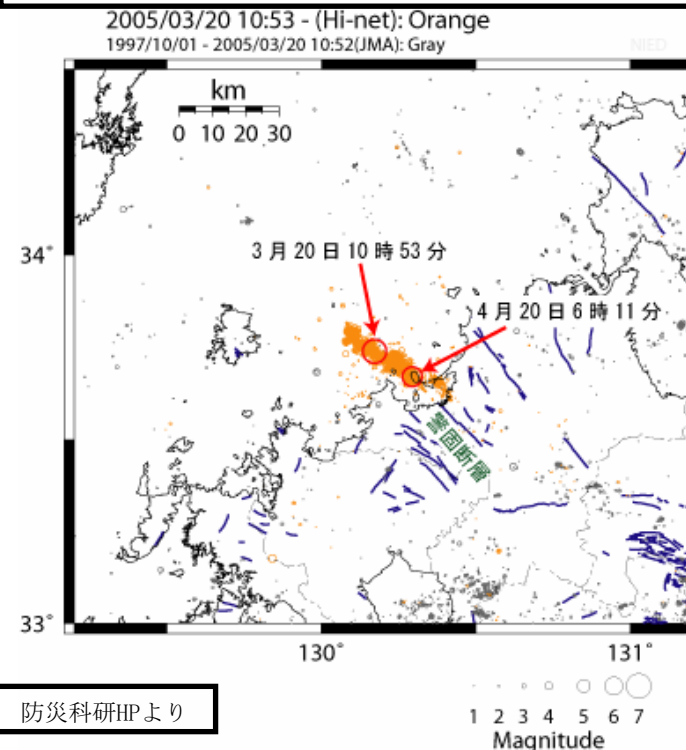
- 近年国内外で発生した横ずれ断層による主な地震では、各種観測データに基づく検討から、震源断層はいずれもほぼ鉛直であることが明らかにされている。
- 緩く傾斜する断層面を横ずれさせるような応力場は考えにくく、一般的に、横ずれ断層の震源断層面はほぼ鉛直であると考えられている。
- 敷地前面海域の断層群について、当該地域では内陸地殻内地震の活動性が低く面的な配列は認められないが、当該断層が横ずれ断層であることを考慮すると、震源断層はほぼ鉛直と考えられる。

2000年鳥取県西部地震の余震分布



防災科研HPより

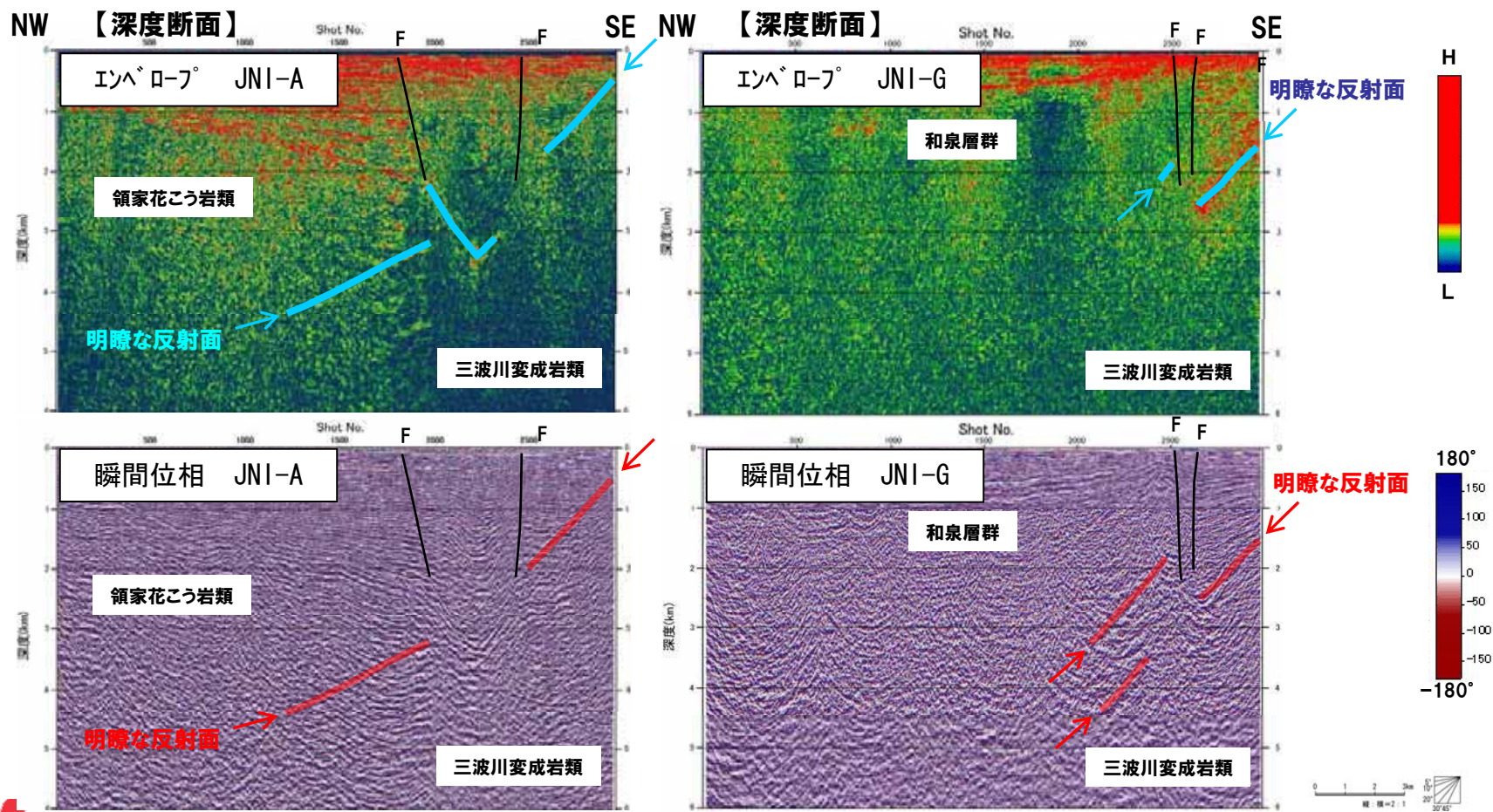
2005年福岡県西方沖地震の余震分布



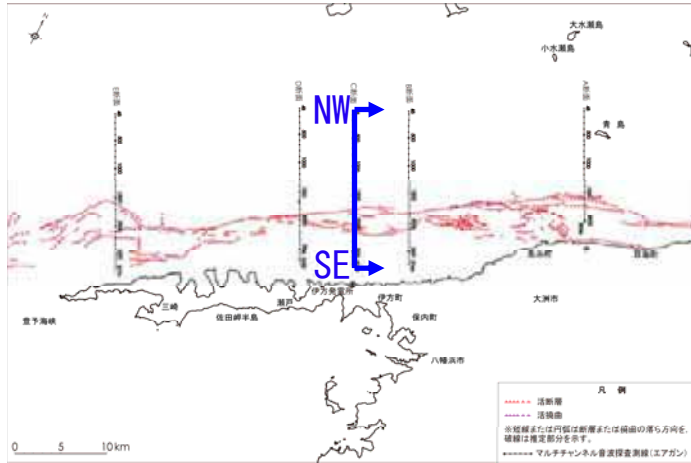
防災科研HPより

II 4. 4-5 地球物理学的な評価(反射法探査結果)

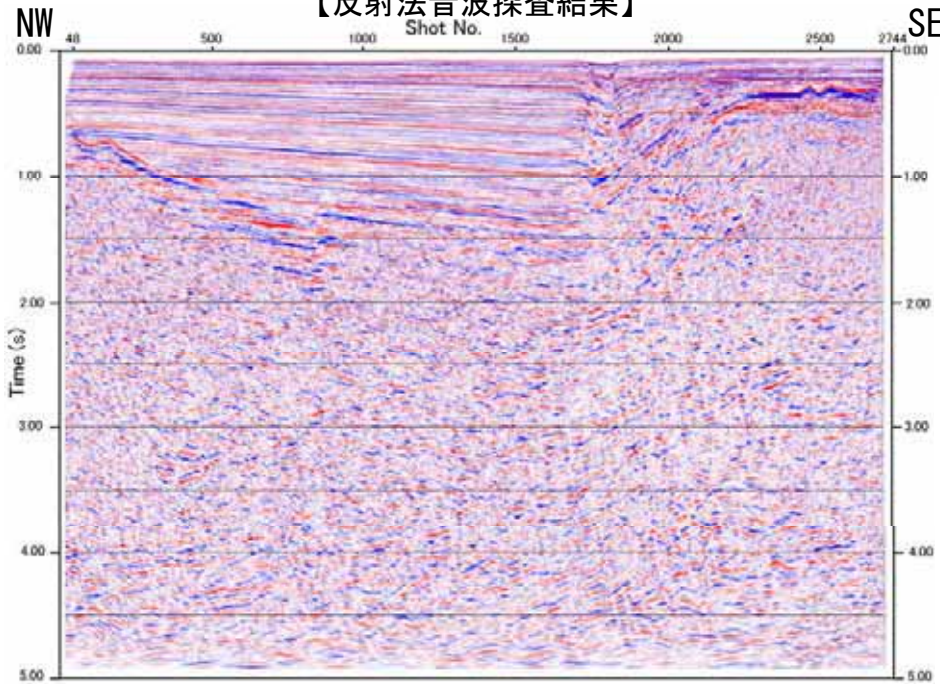
○地下浅部で幅を持って雁行配列する活断層はいずれも堆積層内で高角度である。
 ○地質境界断層は北傾斜であることが示唆されるものの、アトリビュート解析結果によると、三崎沖ジョグの断面 (JN1-A) および串沖ジョグの断面 (串沖, JN1-G) においては、堆積層中にみられる高角度の活断層の下方で、北傾斜する地質境界断層が高角度の断層によって変位を受けている可能性を示唆する結果が得られた。



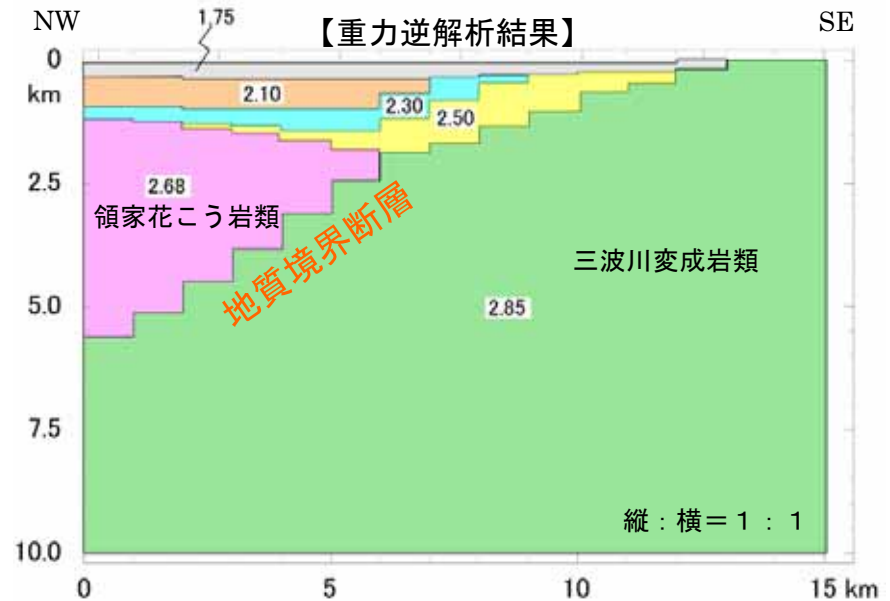
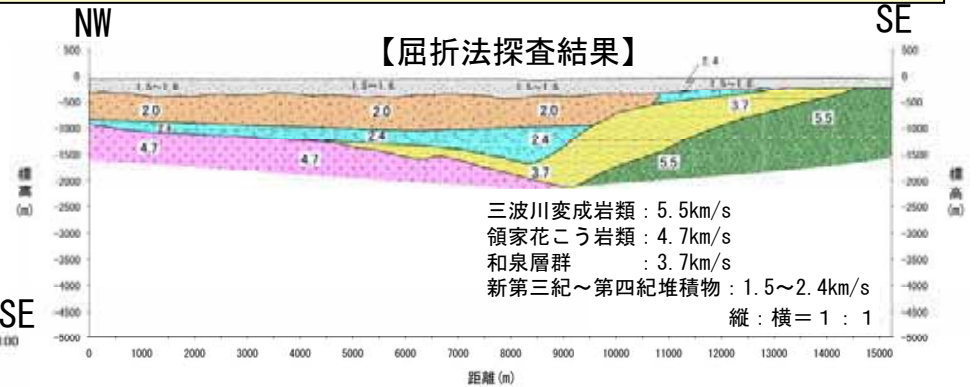
II 4. 4-6 地球物理学的な評価(重力逆解析)



【反射法音波探査結果】



○反射法探査, 屈折法探査の結果を基に重力逆解析を実施した結果, 地質境界断層は30~40度で北傾斜しているものと評価される。震源断層が, 北傾斜する地質境界断層と一致する可能性も考えられる。



II 4. 4-7 断層傾斜角の総合評価(まとめ)

- 敷地前面海域の断層群は直線的なトレースを示す右横ずれ断層であり、変動地形学的な観点、地震学的な観点からは、震源断層はほぼ鉛直と評価される。なお、わずかに北落ちの正断層成分を有すると推定される。
- 反射法探査によると、地下浅部で幅を持って雁行配列する活断層はいずれも堆積層内で高角度である。
- 地質境界断層は北傾斜であることが示唆されるものの、アトリビュート解析結果によると、三崎沖ジョグの断面（JN1-A）および串沖ジョグの断面（串沖，JN1-G）においては、堆積層中にみられる高角度の活断層の下方で、北傾斜する地質境界断層が高角度の断層によって変位を受けている可能性を示唆する結果が得られた。
- なお、反射法探査、屈折法探査の結果を基に重力逆解析を実施した結果、地質境界断層は30~40度で北傾斜しているものと評価される。
- 以上、変動地形学的な観点、地震学的な観点、さらにはアトリビュート解析結果も含めた地球物理学的な観点から総合的に評価し、地震動評価における震源断層面の傾斜角として鉛直を基本とする。なお、北傾斜する地質境界断層が震源断層面である可能性も否定しきれないため、その可能性も考慮することとする。